

プラズマ物理学 I 講義メモ (第 4 回)

(担当: P 研 渡邊智彦; 2014.5.22 作成)

3.4 補足: ジャイロ運動

念のため, 前小節で触れたジャイロ運動についてまとめておこう. 質量 m , 電荷 q をもつ非相対論的な古典的粒子が一様磁場 \mathbf{B} の中を運動している. 電場がない場合, 磁力線に平行方向には等速運動をする. 以下では磁力線垂直方向のみを考えればよい. 粒子位置を \mathbf{x}_\perp , 速度を \mathbf{v}_\perp とすれば,

$$\dot{\mathbf{x}}_\perp = \mathbf{v}_\perp \quad (1)$$

$$\dot{\mathbf{v}}_\perp = \frac{q}{m} \mathbf{v}_\perp \times \mathbf{B} = \Omega \mathbf{v}_\perp \times \hat{\mathbf{b}} \quad (2)$$

[ここで $\hat{\mathbf{b}}$ は磁場方向の単位ベクトル, $\Omega = qB/m$ はサイクロトロン (ジャイロ) 角周波数]. 式 (2) に右から $\times \hat{\mathbf{b}}$ を作用させ, ベクトル公式を使うと

$$\frac{d}{dt}(\mathbf{v}_\perp \times \hat{\mathbf{b}}) = -\Omega \mathbf{v}_\perp \quad (3)$$

これらから単振動の式

$$\ddot{\mathbf{v}}_\perp = -\Omega^2 \mathbf{v}_\perp \quad (4)$$

を得て, $v_x = v_\perp \cos(\Omega t + \delta)$, $v_y = -v_\perp \sin(\Omega t + \delta)$ となることが直ちにわかる (δ は初期位相). ここで $\hat{\mathbf{b}}$ を z 軸の正の方向に取った ($B > 0$). 電荷 q の符号により Ω の正負, すなわち磁場中の回転方向が定まる ($q > 0$ のイオンは時計回り, $q < 0$ の電子は反時計回り). さらに \mathbf{v}_\perp を時間積分して $x = r_L \sin(\Omega t + \delta) + x_0$, $y = r_L \cos(\Omega t + \delta) + y_0$ を得る. ここでジャイロ (または Larmor) 半径 $r_L = v_\perp / \Omega$.

電子サイクロトロン振動数 $f_{ce} = |\Omega_e| / 2\pi$ の値を見積もってみる. 磁場 $1T$ の時, $m_e \sim 9 \times 10^{-31}$ とすると, $f_{ce} \sim 3 \times 10^{10} \text{Hz}$. 一方, 10eV の電子の速度はおおよそ $2 \times 10^6 \text{m/s}$ だから, 磁場 $1T$ の時の電子ジャイロ半径は $|r_L| \sim 10^{-5} \text{m}$ となる. これはこのエネルギーの電子がもつ de Broglie 波長よりもずっと長いことがわかる.

4 集団運動の方程式

4.1 運動論的方程式

位相空間 (\mathbf{x}, \mathbf{v}) 上の粒子保存から一体速度分布関数 $f(\mathbf{x}, \mathbf{v}, t)$ の発展方程式が導かれる.

$$\frac{\partial f}{\partial t} + \mathbf{v} \cdot \nabla f + \mathbf{a} \cdot \frac{\partial f}{\partial \mathbf{v}} = 0 \quad (5)$$

ここでは粒子間衝突は十分に小さく無視できるものとしている。これを Vlasov 方程式と呼ぶ。この式は、プラズマを構成するそれぞれの粒子種ごとに考える。 \mathbf{a} は一粒子の加速度を表し、電磁場による場合、

$$\mathbf{a} = \frac{q}{m}(\mathbf{E} + \mathbf{v} \times \mathbf{B}) \quad (6)$$

式 (5) を位相空間 (\mathbf{x}, \mathbf{v}) 上の移流方程式と見ると、その移流速度 (\mathbf{v}, \mathbf{a}) は非圧縮流であることが分かる。実際、 \mathbf{x} と \mathbf{v} を独立変数と見た時、 $\partial v_i / \partial x_i = 0$ 、 $\partial(E_i + \epsilon_{ijk} v_j B_k) / \partial v_i = 0$ となっている。これは、Hamiltonian 流が非圧縮であることによる。つまり、Vlasov 方程式は

$$\frac{\partial f}{\partial t} + \dot{q}_i \frac{\partial f}{\partial q_i} + \dot{p}_i \frac{\partial f}{\partial p_i} = 0 \quad (7)$$

とも表されるが、正準方程式

$$\dot{q}_i = \frac{\partial H}{\partial p_i}, \quad (8)$$

$$\dot{p}_i = -\frac{\partial H}{\partial q_i}, \quad (9)$$

から (\dot{q}_i, \dot{p}_i) の非圧縮性は明らかであろう。同時に、位相空間の微小体積要素の体積は不変であることが示される (Liouville の定理)。また Poisson 括弧式を用いて式 (7) は

$$\frac{\partial f}{\partial t} + \{f, H\} = 0 \quad (10)$$

の形にも表される。すなわち f は運動の積分であり、粒子軌道に沿って f の値は一定に保たれる

$$\frac{df}{dt} = 0. \quad (11)$$

また、通常の流体方程式における連続の式

$$\frac{\partial \rho}{\partial t} + \nabla \cdot (\rho \mathbf{v}) = 0 \quad (12)$$

との対比は興味深い。

4.2 分布関数のモーメント量

後に運動論的方程式から流体方程式を導出するために、分布関数のモーメント量を定義しておこう。数密度 $n(\mathbf{x}, t)$ は、 $f(\mathbf{x}, \mathbf{v}, t)$ の速度空間積分

$$n(\mathbf{x}, t) = \int_{-\infty}^{+\infty} f(\mathbf{x}, \mathbf{v}, t) d^3 v \quad (13)$$

で与えられる. これを f の 0 次モーメントと呼ぶ. 次に f の 1 次モーメントは, \mathbf{v} を f に乗じたものの速度空間積分から

$$n\mathbf{u}(\mathbf{x}, t) = \int_{-\infty}^{+\infty} \mathbf{v} f(\mathbf{x}, \mathbf{v}, t) d^3v \quad (14)$$

として決められ, 粒子フラックスを与える. \mathbf{u} は平均流速を意味する.

さらに \mathbf{u} に対する相対速度を \mathbf{v}' とすれば (すなわち, $\mathbf{v} = \mathbf{u} + \mathbf{v}'$), それを用いた 2 次モーメントは圧力テンソル \mathbf{P} を与える

$$\mathbf{P} = m \int_{-\infty}^{+\infty} \mathbf{v}' \mathbf{v}' f(\mathbf{x}, \mathbf{v}', t) d^3v' \quad (15)$$

(ここで $\mathbf{v}' \mathbf{v}' = v'_i v'_j$ は diadic). しばしば簡単のために, f が \mathbf{v}' に対して等方的な場合に議論が限定される. この場合, 圧力テンソルは $\mathbf{P} = p\delta_{ij}$ となり, p が通常の意味での圧力と理解される.

$$p = \frac{m}{3} \int_{-\infty}^{+\infty} \mathbf{v}' \cdot \mathbf{v}' f(\mathbf{x}, \mathbf{v}', t) d^3v' \quad (16)$$

(\mathbf{P} と p の式での \cdot の有無に注意; p は $\text{tr } \mathbf{P}/3$). Maxwell 分布に対して $p = nT$ となることが直接確かめられる. この \mathbf{P} を使うと, \mathbf{v} で定義した 2 次モーメントは

$$mn\mathbf{u}\mathbf{u} + \mathbf{P} = m \int_{-\infty}^{+\infty} \mathbf{v}\mathbf{v} f(\mathbf{x}, \mathbf{v}, t) d^3v. \quad (17)$$

となる. ここで

$$\int_{-\infty}^{+\infty} \mathbf{v}' f(\mathbf{x}, \mathbf{v}', t) d^3v' = 0 \quad (18)$$

を使った.